

終える命、

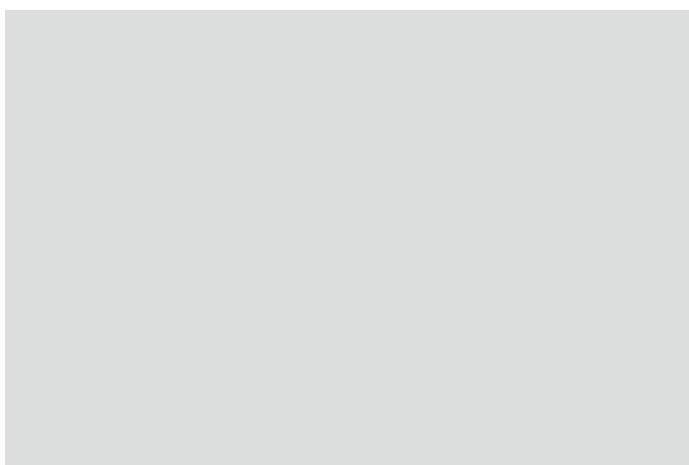
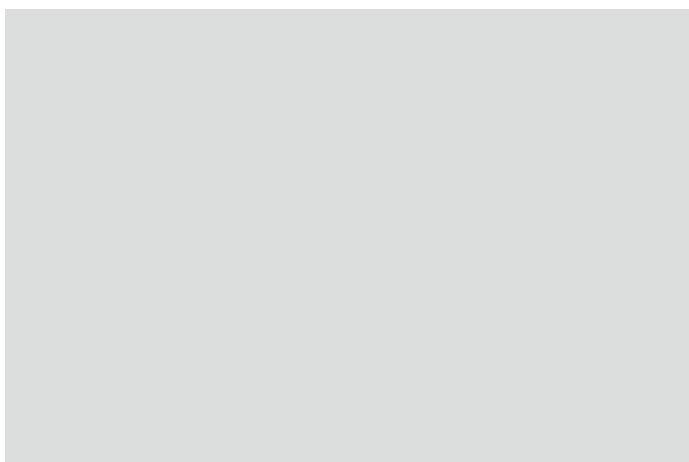
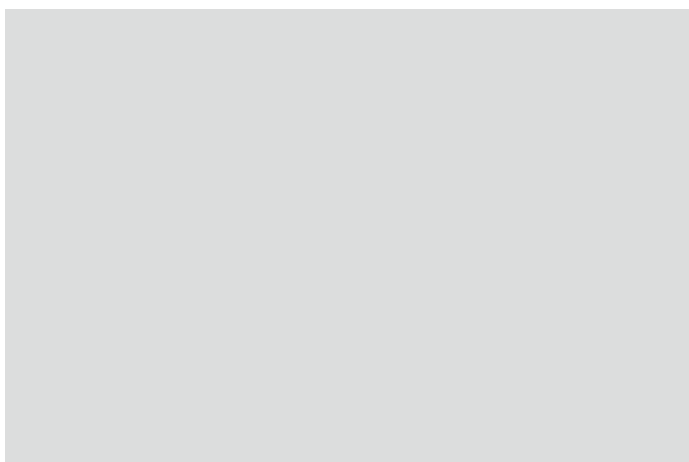
つなぐいのち

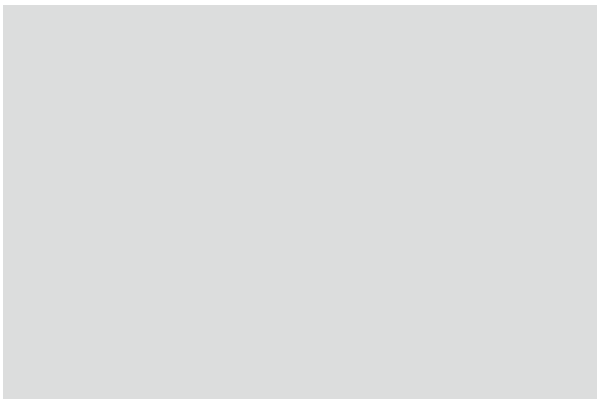
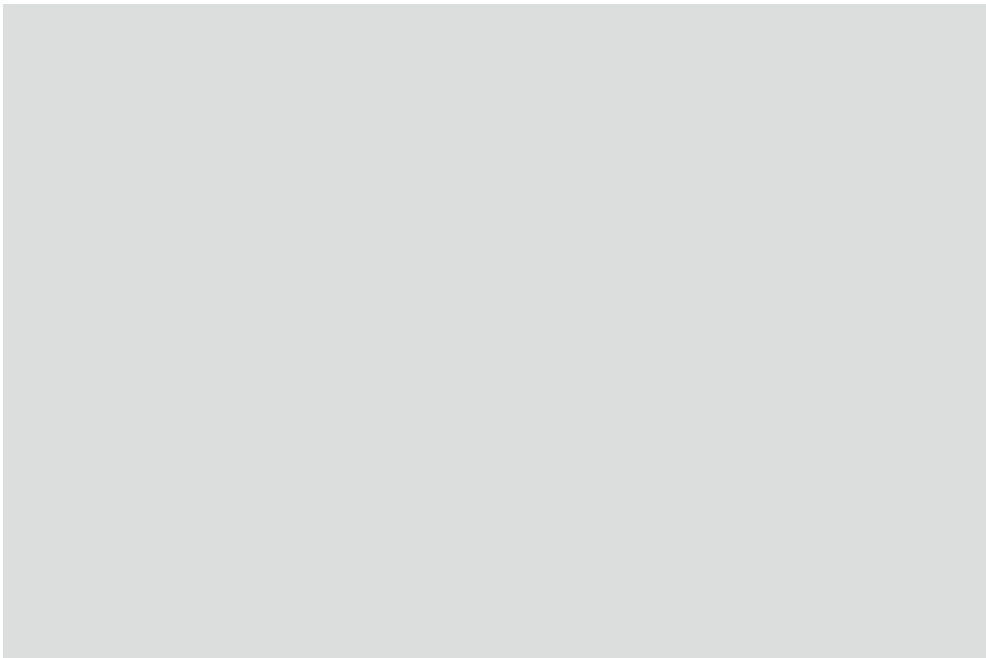
國
森
康
弘

第8回 もうひとつの家

※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。

入居者や家族が触れ合う「大家族」





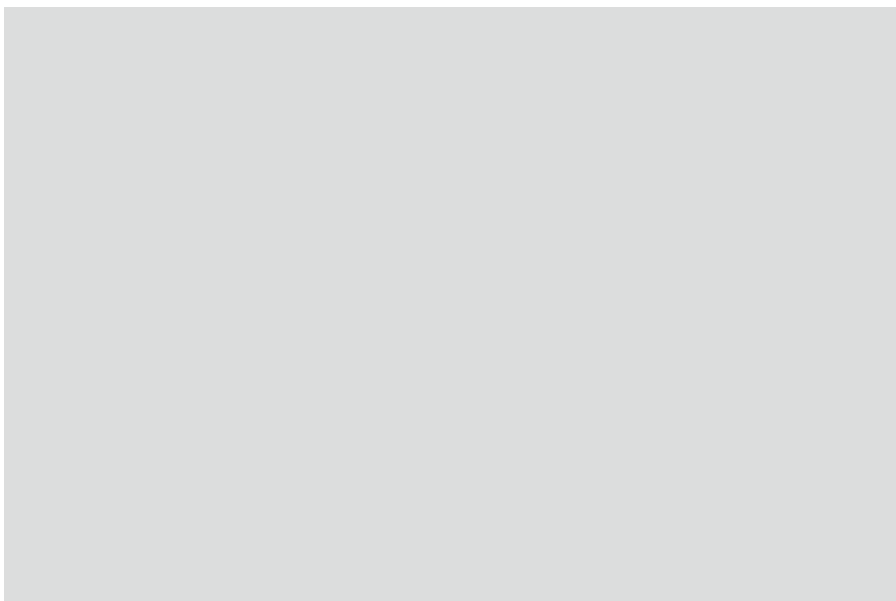
東

京都小平市にある閑静な住宅街のマンションの1階に、2014年春、ホームホスピス「樫」(ゆずりは、嶋崎叔子理事長)がオープンした。白と木目を基調にした内装で、5つの個室にキッチンとリビング、トイレ、風呂……。開設以降、ここに通わせてもらっている。

80代、90代を中心とした入居者の「とも暮らし」。さまざまな音が聴こえてくる。ヘルパーさんが野菜を刻む包丁。カコーン、カコンと卓球。「誰かさんが、見つけた」と、カラオケの熱唱。昔話に花を咲かせながら、時に大笑い。遊びに来た子どものはしゃぎ声。夜中のいびき……。

開設当初から暮らす多美さんは、いつもニコニコ。認知症を抱えつつ、その笑顔で樫の空気を和ませる。次いで入居してきた清子さんは、深みのある表情で真面目な発言をしながら、「鼻の穴は写さないでね」とティッシュで鼻を押さえたりして、ときどきおちゃめな笑いを誘う。

「実は私ね、喜代子さんの写真によく話しかけているの」。清子さんは、美容院に行ったことや、ハンバーグを食べたことなど日常の出来事を、壁に貼った喜代子さんの写真に触れながら、報告しているという。



喜代子さんは1か月ほど前に、がんで亡くなった。2人は、はじめはギクシャクしていたものの、ともに暮らす日々を重ねるうちに仲良くなり、いたわり合う間柄になった。清子さんは、大切な友人が亡くなって以来ふさぎ込みがちだったが、久々にその喜代子さんのことを口にした。「また一緒に、お話がしたいわ」。

樫では、入居者が各々のリズムで自由に生活する。家族も好きなきに、好きだけ会いに来られる。入居者同士が親しくなるのももちろん、家族同士もひざ突き合わせ、喜びや悩みを共有していく。大きく、ゆるやかな家族、親族のようなつながりができる。

家族介護が難しい家庭が少なくないなか、ヘルパーによる24時間365日の寄り添いに加えて、ケアタウン小平などからの訪問診療・看護のほか、訪問リハビリ、デイサービスなどの外付けサービスも、心強い。

樫は、本当の自宅ではないけれど、なくてはならない「居場所」になった。喜代子さんの旅立ちが迫った夜、多美さんは手を握って、呼びかけた。「喜代子さん……」。清子さんも部屋に来た。「なに寝てるの。らっきょう買ってきたから、食べましょう」。それぞれの目から、涙がこぼれた。

〈2014～15年に、東京都にて撮影〉

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ（農文協）ほか。